



ア ト リ エ 訪 問

第 12 回

森村泰昌

美術家

1985年にゴッホの自画像に扮した写真作品を発表し、美術界を驚愕させた森村泰昌。その後も、絵画や人物になりきったセルフポートレートという手法で制作し続けている。彼の独創的な作品は、いったいどのような場所で生み出されているのだろう。その現場へ伺った。

撮影 伊東俊介

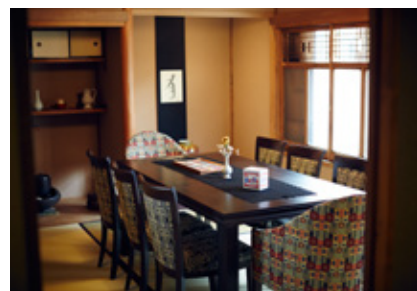


大阪・鶴橋^{つるはし}に生まれた森村泰昌は、長年この地に仕事場を構えている。大学卒業後、彼が最初に構えたアトリエは、緑茶商の父親が所有していた高架下の倉庫だった。現在、そのアトリエは撮影スタジオとして使用し、その他に、「露地庵」^{ろじあん}「露地蔵」^{ろじくら}と名付けられた二か所の仕事場をもつ。「露地庵」は、書斎のような場所で、「露地蔵」は作品を保管したり、打ち合わせを行ったりする場所だそう。インタビューは、古い長屋を改築した「露地蔵」で行われた。

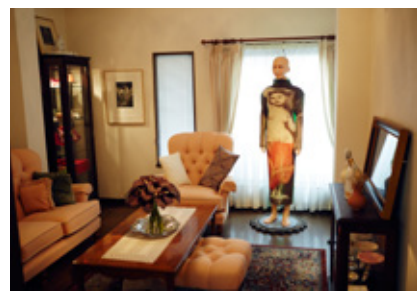
——洋間と和室が隣り合っていて、いい雰囲気ですね。

森村 明治維新の頃のような、和洋入り混じっている感じがいいかなと思って。実はこの建物、小学校の同級生の家だったんです。6年ほど前に、売りに出すというので譲ってもらい、改築して使っています。

この和室では、よく大勢で打ち合わせをするんですよ。僕の作品って、衣装をつくる人、小道具を手配する人、写真を撮る人など、多くの人の



打ち合わせで使う和室。畳の上にあえて机と椅子を置き、和洋入り混じった雰囲気に。



「露地庵」の2階は応接スペース。至る所に、森村さんの作品が置かれていて、ハッとする。

力が必要なので。でも、専属のスタッフがいるわけではありません。普段は別の仕事をしていて、手が空いたときに手伝ってくれる人が10名ほどいます。中には学校の先生もいますよ。完璧な制作チームというより、自然発生的に集まった雑多なチーム。でも、そのほうがおもしろいんじゃないかな。

きちっと分業して作品を制作しているわけではないので、打ち合わせでは、みんな好き勝手なことを言います(笑)。「次はゴッホをテーマにしようと思うんだけど」と投げかけると、全員で何時間もゴッホの話だけを延々とすることもありますよ。

僕の作品は、絵画や人物をテーマにしているけど、それをただ真似するのではなく、解釈を入れているので「どう解釈してどんな作品にするのか」、何度も話し合いを重ねます。——話し合いを経て、小道具や衣装を準備し、いざ撮影となったら、どのような感じなのでしょう。

森村 丸一日かかりますね。朝からセッティングをして、衣装を合わせたりメイクをしたりして、夜に撮影が始まり、翌日までかかる……という感じでしょうか。一度でスパッと満足のいくものが撮れたらいいんだけど、僕の場合は、すごく時間がかかります。ヘトヘトでメイクも崩れかかって、発酵寸前……というときにいい写真が撮れるんです(笑)。

——2016年には大阪で大規模な個展を開催し^(※)、新作を多く発表されましたね。

森村 新作は30点ぐらいかな。ベラスケスの「ラス・メニーナス」をテーマにした作品も何点か制作しました。

実は最初に「ラス・メニーナス」を画集で見たとき、そのよさが全然



右上は、フランシスコ・デ・ゴヤの「黒衣のアルバ女公爵」をテーマにした森村さんの作品。

わからなくて。作品を論じた文章も読みましたが、やはりわからなかった。でも、プラド美術館で実物を見たら「あ、いいかも」と思えて、作品のテーマにすることにしました。しかし、別のときに再び美術館を訪れて絵を見てみたら、「あれ？ 何か冴えないな」と感じてしまった。すでに作品にすることが決まっていたので、困ったなあと思いながら、もう一度、美術館を訪れ、閉館後に照明を変えて絵を撮影させてもらったんです。そしたら、絵の色合いが違って見え、すごくいい世界がそこに現れてきた。「ああ、そうなんや」と思いました。一つの絵と、何度も繰り返し付き合ったから、ようやくそのよさがわかった。美術も人間と同じ。時間をかけて付き合わないとは、わかることはできないんです。

すぐに「わからない」こと。その「わからなさ」と付き合うこと。それこそが美術のおもしろさなのだと、僕は思っています。

※大阪の国立国際美術館で2016年4月5日～6月19日に開催された大回顧展「森村泰昌:自画像の美術史—「私」と「わたし」が出会うとき」

美術はすぐに『わからない』もの。だからこそ、おもしろい。

もりむら・やすまさ

1951年大阪府生まれ。

85年ゴッホの自画像にみずから扮して撮影する、セルフポートレート手法による大型カラー写真を発表。以降、一貫してこのセルフポートレート表現を追究している。

88年のヴェネチア・ビエンナーレ／アペルト部門出展。映画や芝居、パフォーマンス、さらに文筆活動など多方面に活躍中。2011年にはその芸術活動が評価され、紫綬褒章を受章した。